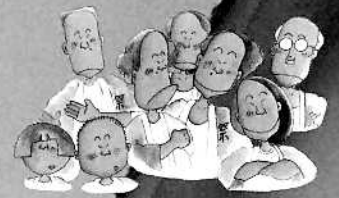




OTAKE

広報

# おおたけ



2000年

11月

No.998

## 祭りばやしが 響くまち

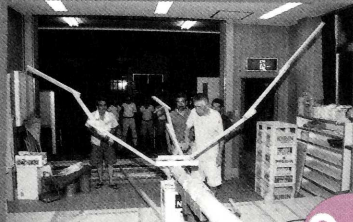
10月15日

秋晴れのもと大竹祭では、奴行列や色とりどりの山車飾りが街を練り歩きました。今月は、その山車飾り作りに取り組む、地域の人々の姿をご紹介します。

(2~4ページ)



こうしてできる  
太鼓台飾り



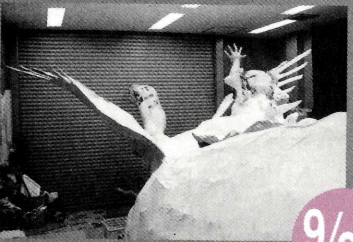
たる木を組み合わせ  
骨組みをつくる

9/7



竹で形をつくり  
新聞紙を貼る

9/13



和紙を貼る

9/20



色を吹き付け、  
あとは最後の仕上げ

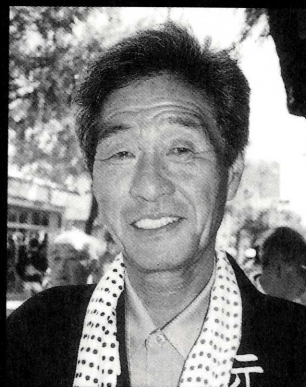
10/5



祭りの前日、  
クレーンを使って  
トラックに積み込む

10/14

地域のみなさんの協力で飾りができます。ありがたいことです。子どもの数は少なくなりましたが、子どもたちのために大人たちが一生懸命になって作りました。



元町4丁目自治会長  
大川 脩 さん



顔は慎重に仕上げます



和紙のにり付け



竹を細く切ります

人形は顔が命

顔の表情には特に気をつかいます。わが子をさらわれ、髪や着物をふり乱して追う母親の叫び声が聞こえてくるような、鬼気迫る表情に仕上げいきます。頬や口元など細かい表情は、建築用のパテを使います。以前は、胡粉を使っていましたが、今は手に入りにくいので、パテで代用しています。昔は、人形の顔は木でできたものをすげ替えていたようですが、今は全部作るので、題材に合った表情を作ることができます。

(次ページに続く)

子どものころから見上げていた大竹祭の山車。毎年新たに作られる、伝説や歴史上の人物を題材にした飾りの数々。笛や太鼓のはやしにのって、子どもたちが山車を曳いていく勇壮で華麗な絵巻物。そんな祭りの山車飾りが、どこでどのようにして作られているのか、不思議な思いで見えてきました。そこで今回の探検隊は、その製作の現場深くに潜入してみました。

飾りのデザイナー登場

太鼓台(たいこんだい)と呼ばれる山車は、元町1〜4丁目、本町、三軒家新栄会(新町・栄町の一部)の6つの地区で作られ、祭り当日は、大竹駅前から元町4丁目までを曳いていきます。市の文化財に指定されている双行列や太鼓台の行列は、明治10年代から始まったと伝えられています。

9月7日、「上り(のほり)」地区といわれる元町4丁目の集会所に設けられた、製作現場を訪ねてみると、すでに10数人の自治会役員や有志の方が集まり、作業に取りかかっていました。

今回「良弁杉の由来」と題された飾りは、有名な人形浄瑠璃の一場面を再現したものです。大鷲にさらわれた子どもが長じて、良弁という東大寺の高僧となり、母親と再会するという物語です。今回は、その大きな鷲が飾りのメインになります。飾りのデザインは、三上良平さん(元町4)が担当しています。三上さんは、もう40年以上飾りを作り続け、自分でデザインするようになってからも30年近くになるそうです。彫刻も手がけられ、総合市民会館にある原爆をテーマにした「叫魂」の像も三上さんの作品です。

姿を現してくる大鷲

集会所の1階には、こざが敷かれ、そこに幅2.4m長さ3.8mの台のサイズにガムテープでしるしがつけられています。その中央には、鉄骨で作られた土台に直径10cmのひのきの丸太が、でーんと載っかっています。これが鷲の骨格になるものです。ひのきは、裏山から地主さんの好意で、伐採してきたものだそうです。

丸太に数10cmの長さに切られた「たる木」を組み合わせて、鷲が羽根を広げた形に骨組みを作ります。棒を無造作にく

つつけているだけに見えるものが、本当に鷲に変身していくとは、信じがたいものがあります。

数日かけて、たる木のまわりに竹材を組んだものを取り付けて、大まかな形を作っていきます。それができあがる、竹の表面に新聞紙を貼り付けていきます。毎晩、自治会の各班から10人くらいが交代で、これらの作業に当たります。

新聞紙で肉づけされていくと、驚くことに、次第に人や鷲の姿がはっきりと現れてきました。

次の週には、その上に白い和紙を貼り付けていきます。女性陣が和紙のにりを

4 好奇心探検隊がゆく

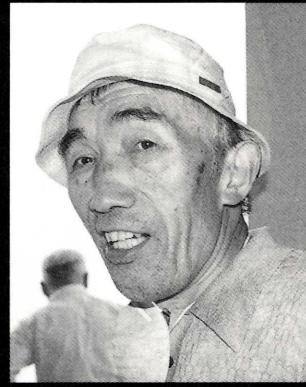


祭りばやし  
響くまち

大竹祭を飾る太鼓台の謎



どんな飾りにするか、みなさんの意向も聞きながら、年中考えています。手伝ってくれる人数も考えて、どれくらいのものでできるか計算して、決めています。



飾りをデザイン  
三上 良平 さん

祭りばやしにも少子化の波

太鼓台は、その名のとおり山車の胴体中央に太鼓がはめこまれています。祭りの当日は太鼓と笛のはやしで、地域の子どもたちが曳いていきます。

笛を吹くのも子どもたちの役割です。祭りの前の週、3日間が笛の練習日になっています。

指導に当たっているのは、中川啓道さん（元町4）です。この地域の笛は、学校で習うリコーダーではなく横笛です。この横笛は、中川さんのおじさんの手づくりで、子ども会に寄付してくれたものです。

慣れない横笛ですが、子どもたちは覚えるのも早いようです。3つの節をくり返し練習します。しかし、祭りも少子化の波で、太鼓台を曳いたり、笛を吹く子どもが減ってきて今では、20人くらいになりました。今後祭りを盛り上げていくためには、対策を考えていかなければならないようです。

中川さん(右)も子どものときから吹いていました



▲横笛は指が見えないのでむずかしい



▲飾りのできに満足のようです

みんなの力で飾り完成

祭り前日の朝、集会所から飾りが運び出されます。10数人の男性で、トラックに積み込みます。「もうちょっと前へ」「ちょっと待って」「傾いたぞ」などの声が飛び交います。大きく広げた鷲の羽根が電柱や屋根に当たらないよう、ゆっくとトラックは進みます。

広場には、太鼓台が1年ぶりに出され、飾り付けを待っています。この台は、昭和28年に作られたもので、台に施されている竜や虎の彫り物は、三上さんが当時20歳のときに彫ったものです。

いくつかに分けて作られた飾りをフオークリフトで台の上に載せて、バランスを考えながら組み立てていきます。

日も傾ぎかけたころ、ようやく飾りができあがります。

三上さんは「今の時代、親子のきずなの大切さをもう一度思い出すため、この題材を選びました」と話してくれます。

三上さんのそばで、親子のきずなをテーマにした飾りを見ながら、この1カ月あまりのことを思い出しました。

地域に暮らす人々のきずな、老若男女、世代間のきずなにより、祭りを作り上げていくみなさんの姿に触れることができただけでした。この素晴らしい飾りも決して魔法のように、いつのまにかできているのではなく、みなさんの力が集まってこそのものだと、実感した探検隊なものでした。

「明日大気にな〜れ」

お祭り ウォッチング



笛と太鼓の音が鳴り響く



先導の奴行列が進みます



青空と同じように祭り気分は上々



天気になりました。

太鼓台は、物語やメルヘンの世界を題材に、毎年新しく作られます

たい こん だい 太 鼓 台 がゆく



仁田四郎猪退治 元町3丁目



良弁杉の由来 元町4丁目



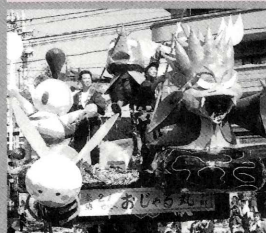
徳川家康 元町1丁目



一心太助と暴れ馬 元町2丁目



人魚の恋 三軒家新栄会



21世紀へ おじやる丸 本町